

プログラム・ノート

山田治生

チェンバーミュージック・ガーデン(CMG)のオープニングを飾る恒例の「堤剛プロデュース」。昨年に引き続き今年も、堤剛と次代を担う気鋭のチェリストたち(伊藤悠貴、笹沼樹、横坂源)の3人は、全員、堤が永久選考委員を務める齋藤秀雄メモリアル基金賞の受賞者である)とのアンサンブルが披露される。近年、チェロ・アンサンブルの人気の高い。その深くて温かい音色が好まれているからであろう。チェロは、重厚な低音からかなりの高音まで音域が広いゆえに、旋律から伴奏まで様々な役割が担え、チェロだけによるカルテットも組むことができる。堤は、自らが音楽監督を務める霧島国際音楽祭などで、積極的にチェロ・アンサンブルに取り組んできた。世代を超えた名手たちが集うCMGのオープニングにふさわしいプログラム。チェロの多彩な魅力が満喫できるに違いない。

ヘンデル(バイヤー 編曲):

ソナタ ト短調 HWV 393 (2つのチェロとピアノ用編曲)

ジョージ・フリデリック・ヘンデル(1685~1759)のソナタ ト短調 HWV 393は、1719年頃に作曲されたと推測されている(ただし真正な作品かどうかは不確かとされている)。オリジナルは、2つのヴァイオリンと通奏低音のための作品であるが、本日は、20世紀前半にハインツ・バイヤーによって編曲された、2つのチェロとピアノのための版が演奏される。バロック時代の器楽曲の形式の一つである教会ソナタの構成に従い、緩→急→緩→急の4つの楽章からなっている。ゆったりと美しい旋律が奏でられる第3楽章は単独でも演奏される。

ビゼー(山本祐ノ介 編曲):『カルメン幻想曲』(チェロ四重奏用編曲)

ジョルジュ・ビゼー(1838~75)のオペラ『カルメン』の舞台はスペインのセビリャ。恋多きロマの女、カルメンは、衛兵ホセを誘惑するが、闘牛士エスカミーリョに心変わりし、最後はホセに殺されてしまう。

本日は、チェロ奏者で指揮者、作編曲家でもある山本祐ノ介が編曲したチェロ四重奏版『カルメン幻想曲』(「前奏曲」「闘牛士の歌」「アラゴネーズ」「ハバネラ」「ジプシー(ロマ)の踊り」などを含む)が演奏される。

ポッパー:レクイエム 作品66 (3つのチェロとピアノ版)

ダーヴィト・ポッパー(1843~1913)は、ブラハに生まれ、チェリストとしてウィーン宮廷歌劇場管弦楽団やヘルメスベルガー弦楽四重奏団などで活躍した。この『レクイエム』は、楽譜出版社を経営し、ポッパーの友人でもあった、ダニエル・ラターターの思い出に捧

げられている。作曲は1891年頃。オリジナルは3つのチェロとオーケストラのための作品であるが、本日は3つのチェロとピアノの版で演奏される。

リムスキー=コルサコフ(ヴァルガ 編曲):『熊蜂の飛行』(チェロ四重奏用編曲)

『熊蜂の飛行』は、もともと、ロシアのニコライ・リムスキー=コルサコフ(1844～1908)のオペラ『皇帝サルタンの物語』で、グヴィドン王子が魔法の白鳥の力で熊蜂に変身し、父親であるサルタン皇帝のいる宮殿へと向かうシーンの音楽として書かれた。無窮動的な16分音符の半音階の動きが熊蜂のブンブンという羽音を模倣している。本日は、ハンガリー出身で、ニューヨーク・フィルの首席チェロ奏者も務めたラースロー・ヴァルガ(1924～2014)による編曲版をチェロ4人で弾く。

ピアッツェティ:セレナーデ 二長調(2つのチェロとピアノ版)

アルフレード・ピアッツェティ(1822～1901)は、イタリアのチェリスト、作曲家。セレナーデ 二長調は1885年頃に書かれたと推測されている。2つのチェロが幅広い音域を奏でる序奏のあと、アンダンティーノの主部に入り、ベルカント・オペラのような美しい旋律が歌われる。

フィッツェンハーゲン:『アヴェ・マリア』作品41

ヴィルヘルム・フィッツェンハーゲン(1848～90)はドイツ出身のチェリスト、作曲家。モスクワ音楽院教授を務め、チャイコフスキーの『ロココの主題による変奏曲』の初演者(及び改訂者)として名を残している。フィッツェンハーゲンは、チェロのための作品を数多く残したが、彼の『アヴェ・マリア』は、それほど多いとはいえないチェロ四重奏のために書かれたオリジナルの作品の一つとして、広く演奏されている。心温まる旋律がゆったりと歌われるアダージョの小品。

J. S. バッハ(ヴァルガ 編曲):無伴奏ヴァイオリン・パルティータ第2番 二短調 BWV 1004 より 第5曲「シャコンヌ」(チェロ四重奏用編曲)

ヨハン・ゼバスティアン・バッハ(1685～1750)の「シャコンヌ」は、無伴奏ヴァイオリン・パルティータ第2番の終曲(第5曲)にあたる。シャコンヌとは古い舞曲の一種であるが、低音の主題が繰り返されるなかで変奏が展開される。この「シャコンヌ」では、冒頭の二短調の重厚な主題が変奏され、中間部では二長調に転じ、圧倒的な音の構築物が作り上げられていく。これも、『熊蜂の飛行』と同じく、ヴァルガによるチェロ四重奏版で演奏される。

(やまだ はるお・音楽評論)